

キーワード

芸術鑑賞、触察、ユニバーサル・ミュージアム

研究概要

本研究は、視覚障害者がアートの分野における立体造形作品を鑑賞する際に、作品を手で触れて鑑賞する触察鑑賞に関する研究である。近年、国立民族学博物館をはじめとして、美術館や博物館などの展示施設におけるユニバーサル化が推進され始めている。視覚障害者が触察鑑賞できる環境というのもその一つである。本研究では、まず初めに視覚障害者の触察時の形状理解に適した作品のサイズや素材について着目し、鑑賞実験によってサイズや素材の適正を明らかにした。

展示施設が触察可能な環境にしていくためには、触察における作品の破損や汚染の問題やコストの問題が生じるため、実物から適正のあるサイズへ変換した鑑賞用レプリカモデルの開発を3D技術を主に使用して進めている。それに際してモデルの作成・運用に関するコストを明らかにし、展示施設により導入しやすい提案について検証する。また、鑑賞活動における作品を味わうための支援として、視覚障害者向けの音声ガイドについて検討している。

鑑賞実験の様子から一部抜粋



サイズが異なるミロのヴィーナス像



素材が異なるシロクマ彫像

応用例・用途

- ・視覚特別支援学校における立体教材としての活用
- ・視覚障害者の芸術活動への参加促進

